

始まりは痴漢から

くじら三匹

成人向け



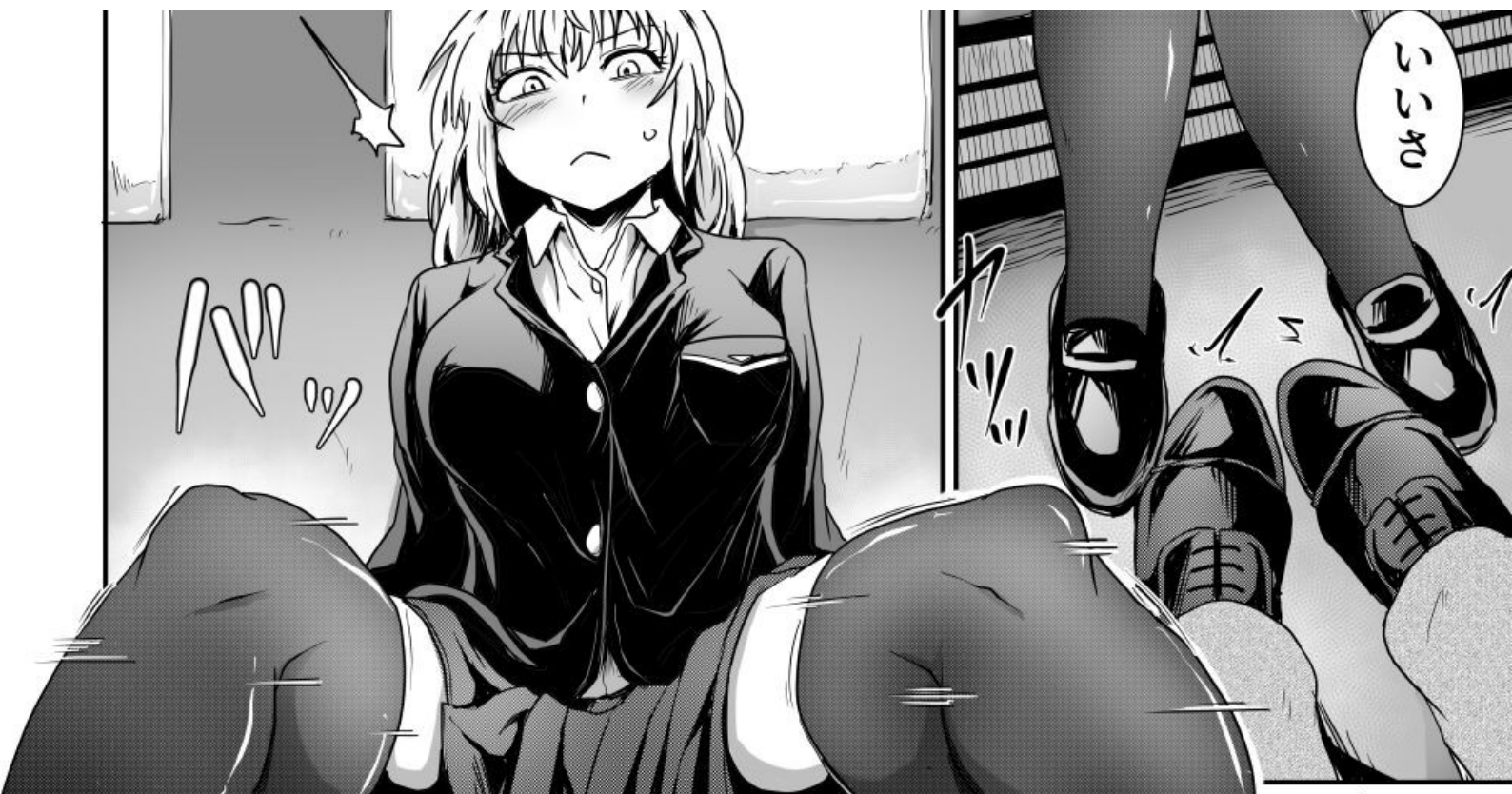


始まりは痴漢から

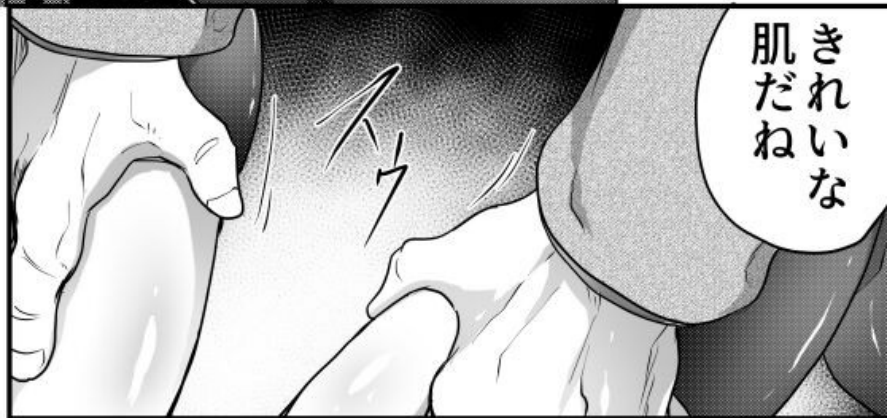


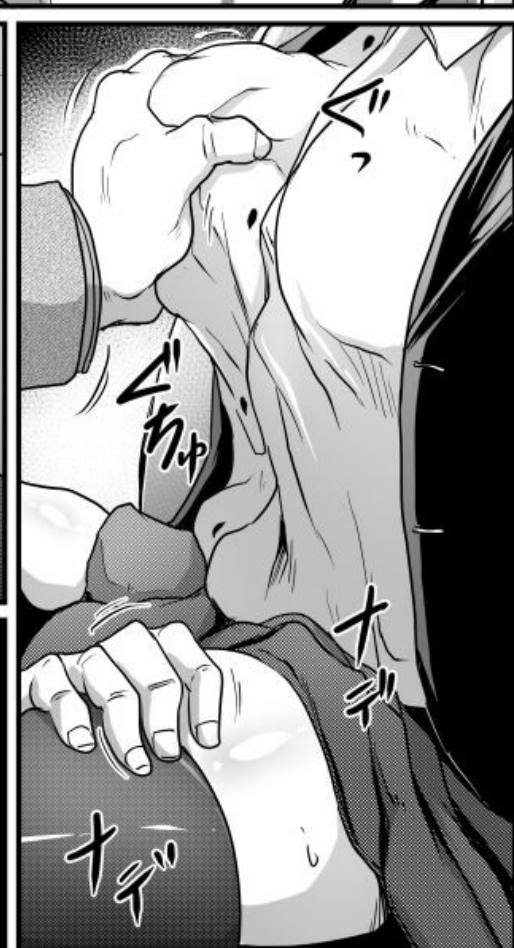
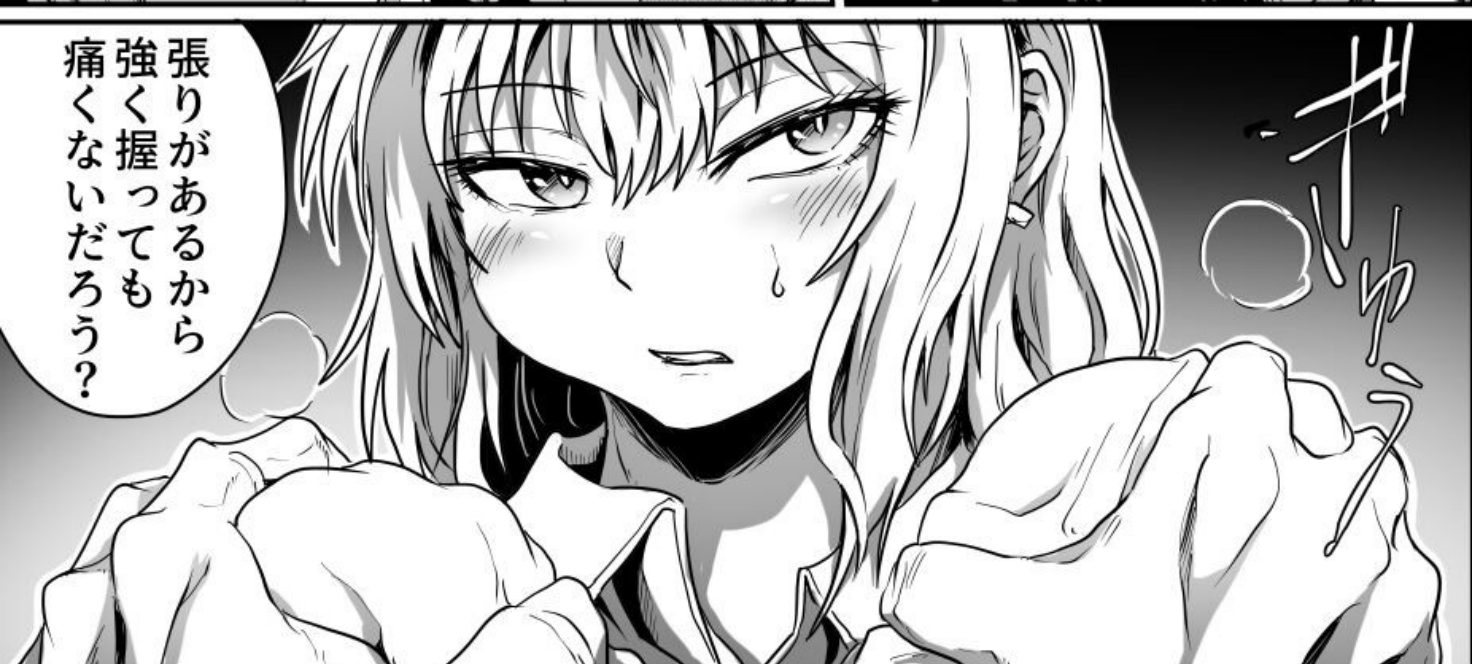






それ以上触ると
声：上げますよ？







駅です



お



ハ

ハッ

もみ

もみ

ガッ

ガッ





親みたいなこと
訊かないで
下さいよ



君のことが
知りたくてね
帰る時間が遅いのは
部活か予備校かい？

どっちにしても
大変な生活で
疲れも溜まるだろう

どっちでもないです
自習ですよ

テストが
近いんで
勉強ばかり
してない……

……我慢が
できるまで
ですよ

でも
拒まないで
いてくれて
嬉しいよ

いくら誘ったって
そこまでは
乗りませんから
ね

じゃあ今の
この時間を
大切にさせて
もらおうかな

忙しい日々だ
ストレス解消
しないと

それは傲慢さ
こっちが一方的に
触ってるしね

テストが終わるまで
ってことかな？
それならストレスが
溜まってたことにな
るね
手っ取り早く場所を
移さないかい？

ん……

もみ

もみ

ん……

ん……

ここまで執拗に手を
出してくるなんて：
性関係がオープンに
なってるっていう話は
本当だったんですか

ん：

世の中が便利に
なったら、みんな
やることはそういう
ことになるんだよ
きっと

いそ

でも、君が手を
出されていない
のは意外だな
彼氏は？

：いませんよ
女子高ですから：

じゃあ僕が
名乗り出ても
いいかな？

あ：

そ、そんな軽々しく
言ってこないで
下さい：

おっぱいを
こんなに
弄られてるのに？

ますます
君のことが
好きになっ
てきたよ

明日も
同じ時間
に会おうね

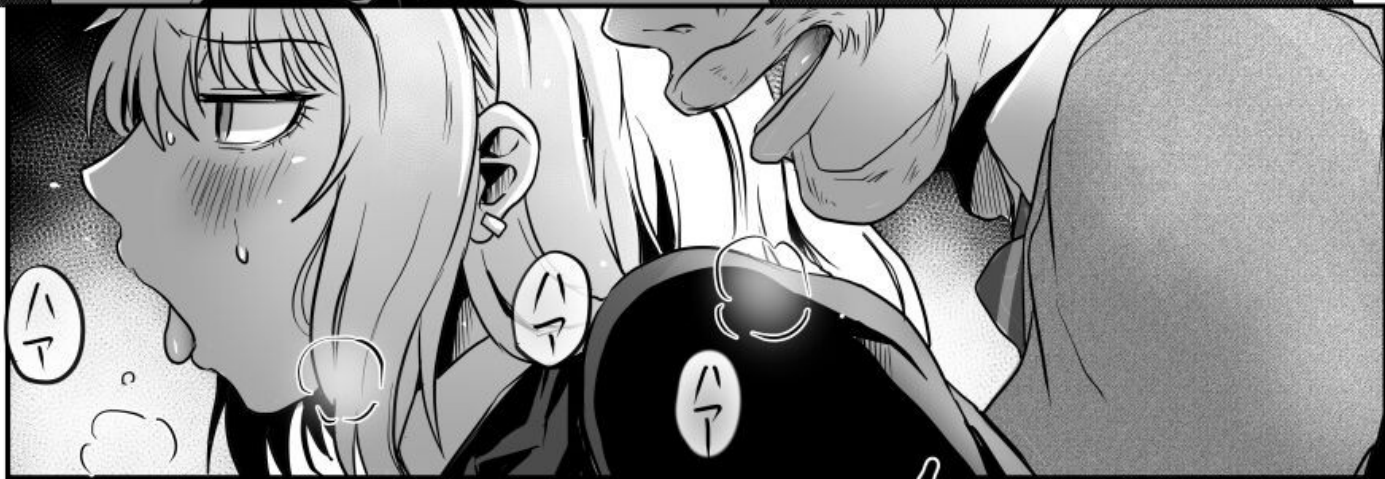
もみ

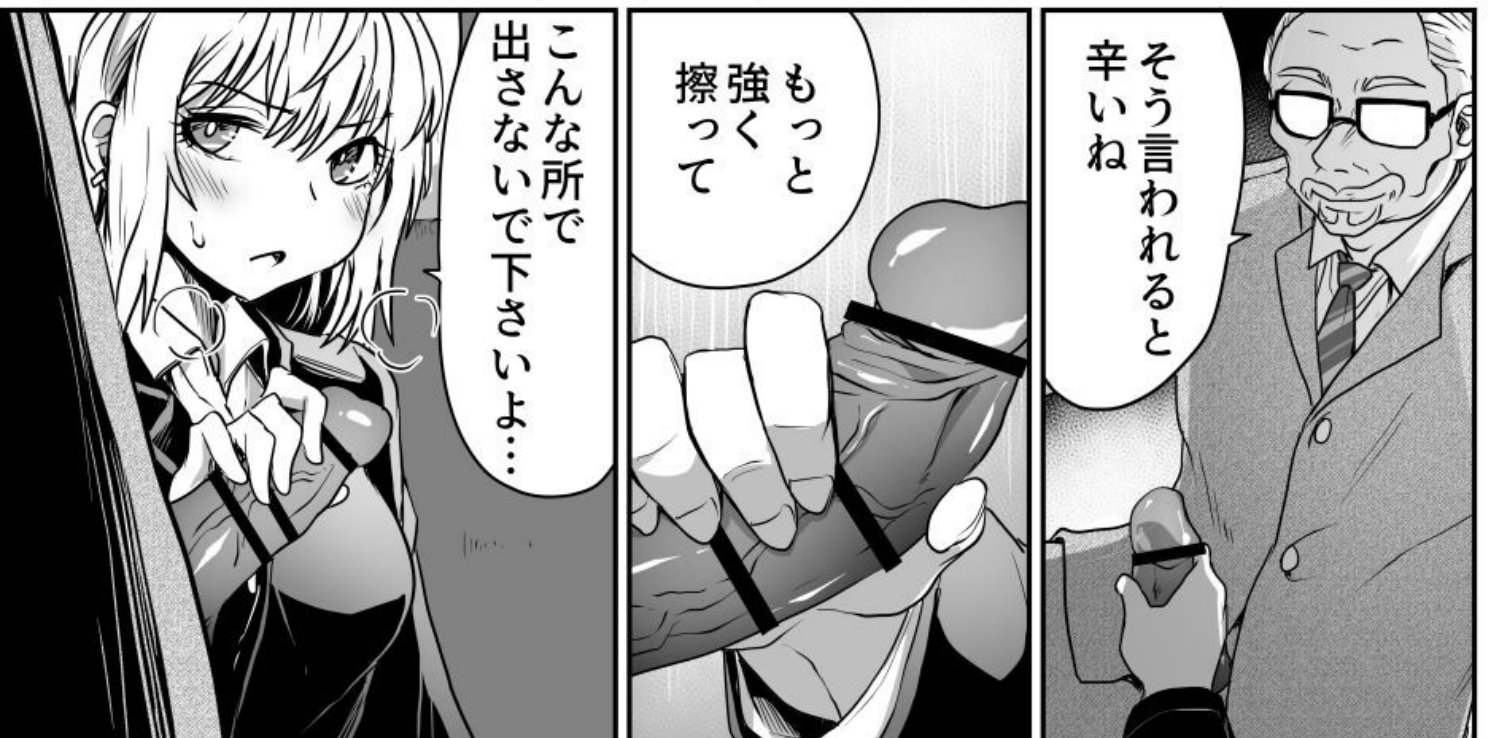
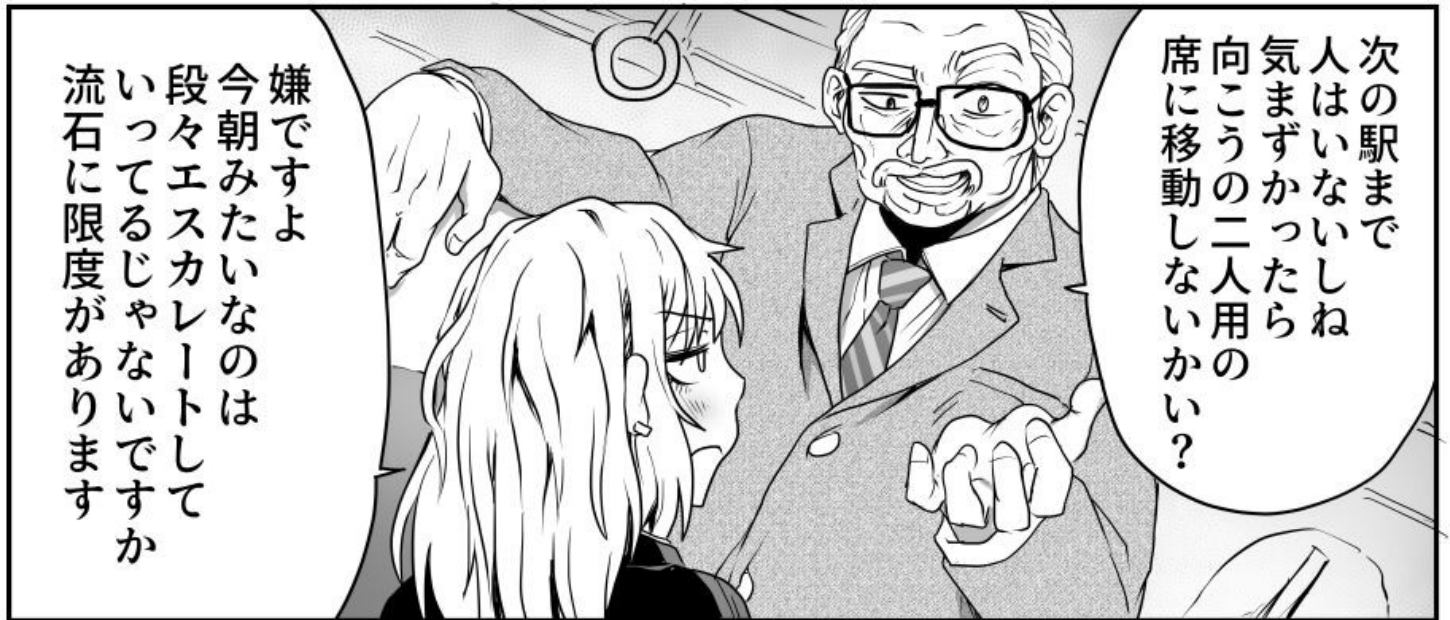
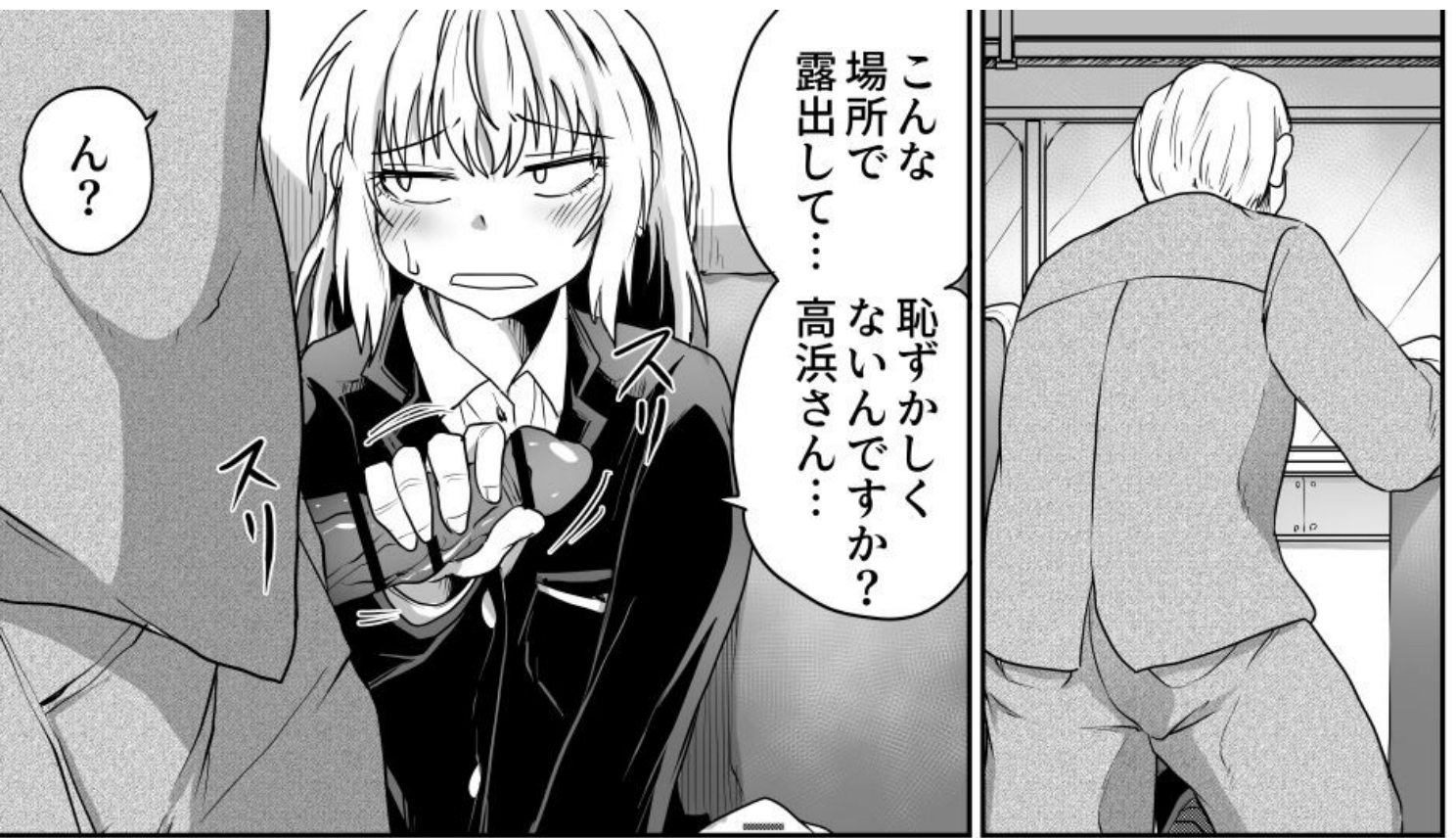
もみ

フシ

ギョ

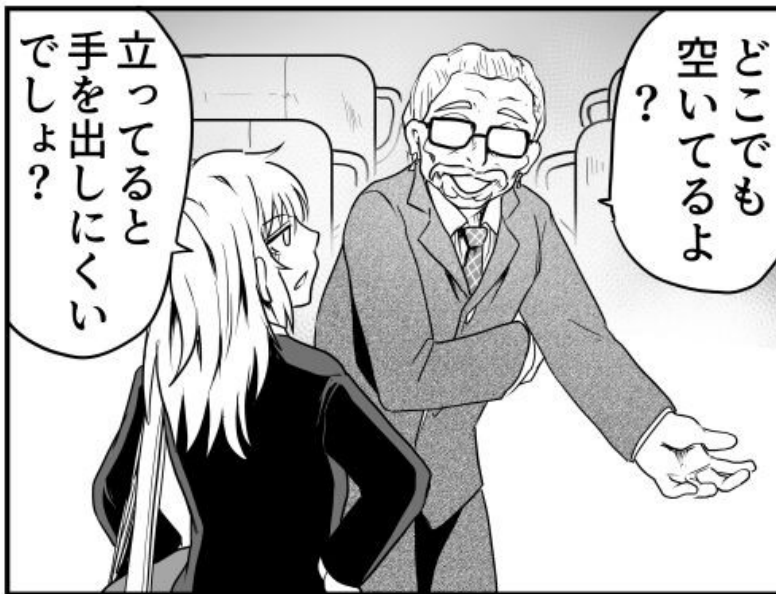












立ってると
手を出しにくい
でしょ？

どこでも
空いてるよ
？



席に
座らない
のかい？



あまり
他のことを
考えるのは…

…
本当にテストが
近いんですよ



OK、手は
出さないよ

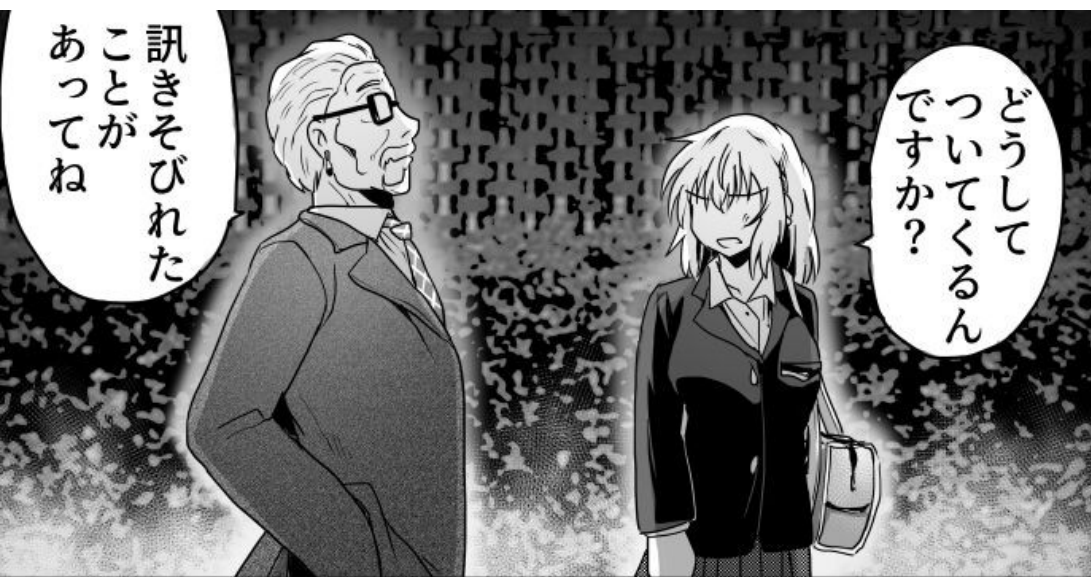
愛想が
尽きたかな？

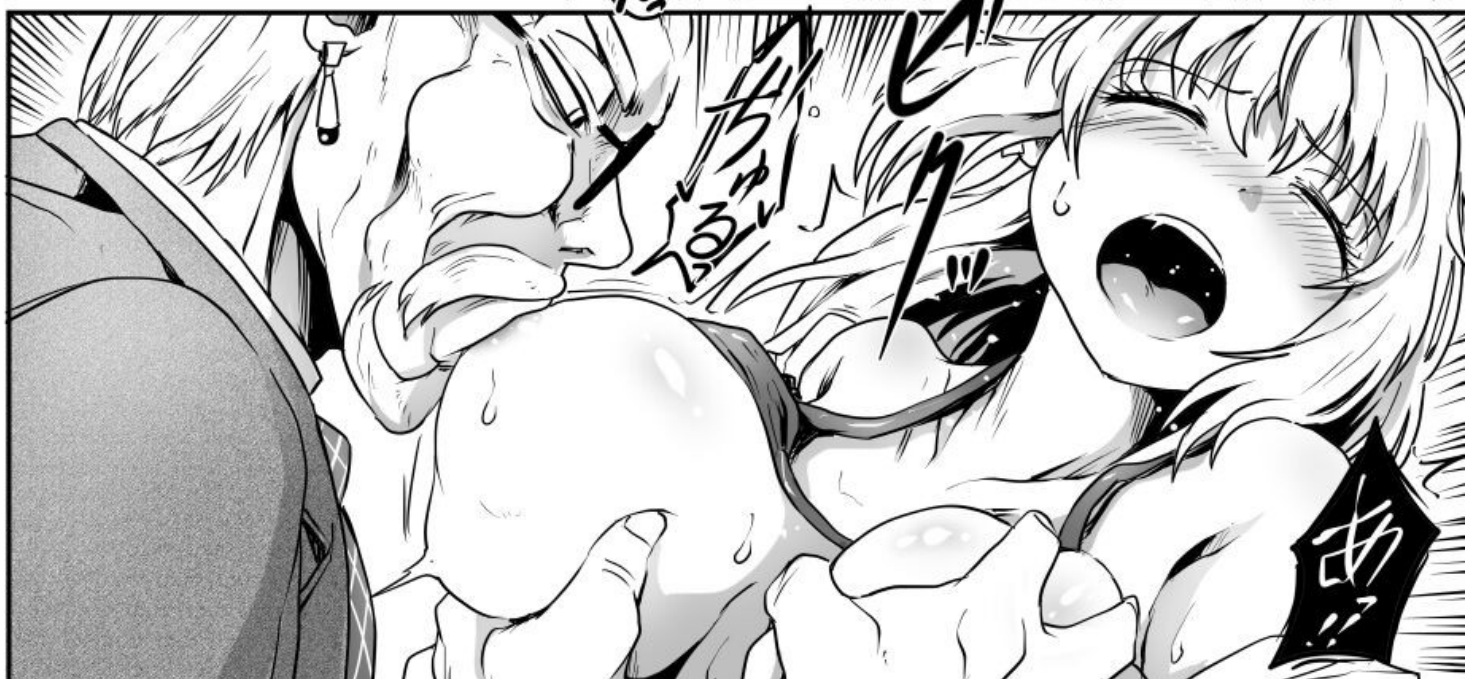


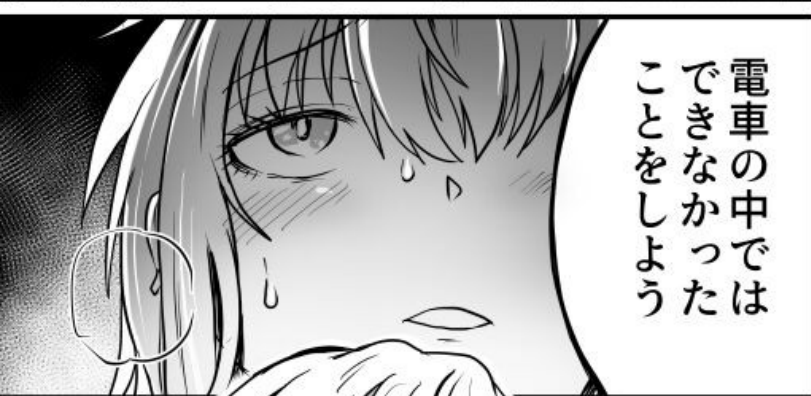
そう…

わかり
ません

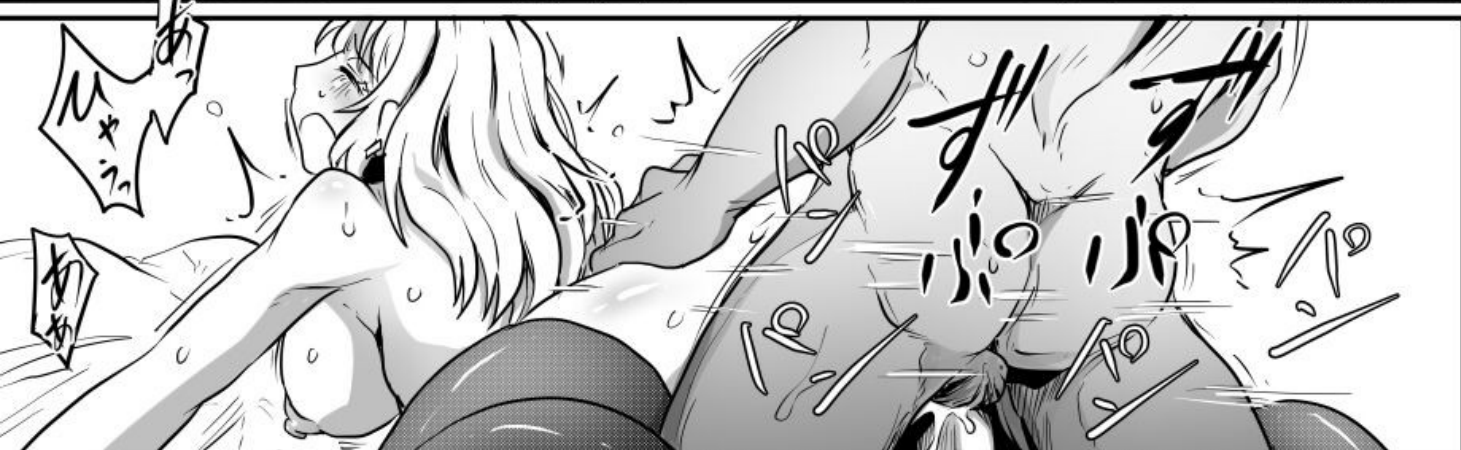
勉強の邪魔
かな？



















高浜さん…
も…頭が…

はー

はー

セックスしてること
しか考えられなく
なってるだろ？

それで
いいんだよ
佐奈ちゃん



あー

んあ

あー



どうして…勉強
忘れちゃう…

思いつめるのは
良くないんだよ
心が荒んで
チャレンジ
できなくなる

メリハリを
つけないと
学んだことは
活かせないんだ

今は…気持ちよくて
リラックス
できているだろう？

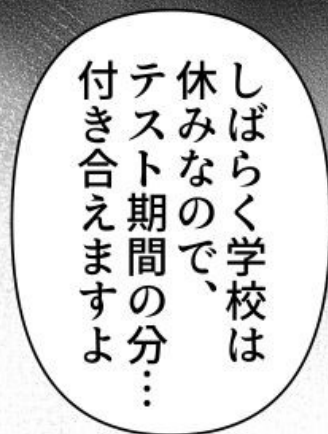


佐奈ちゃんに
協力できて
嬉しいよ



はい…とても
良くなつて
ます…









待合室で蕩ける



雪で電車が
遅れている

何時間後に
来るかは
わからない



待合室には
少女が一人

こんな
辺鄙な駅で

こんな雪の日に
居合わせるのは
彼女くらいだ



彼女は
慣れたように
本をとる

待合室に
炊かれた
ストーブが
彼女のお供だ



せめて挨拶
くらいするのが
礼儀だろう







まずは
馴染ませるよう
に腰を回す

ゆっくりと
準備を
整えてもらう
ためだ



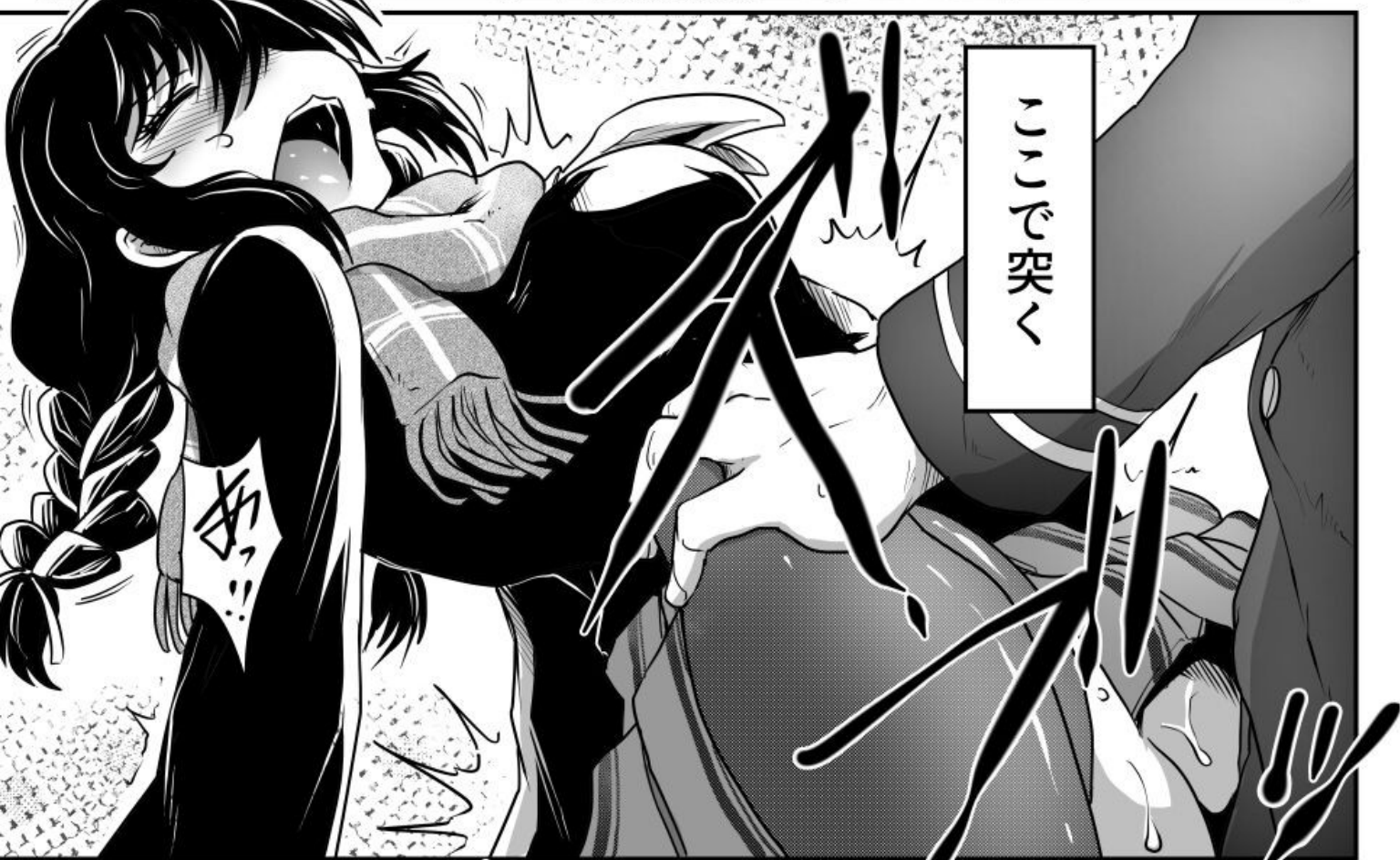
徐々に
溢れてきた
愛液で

男根と
肉壁とが
絡み合っていく

体の強張りも
ほぐれていき

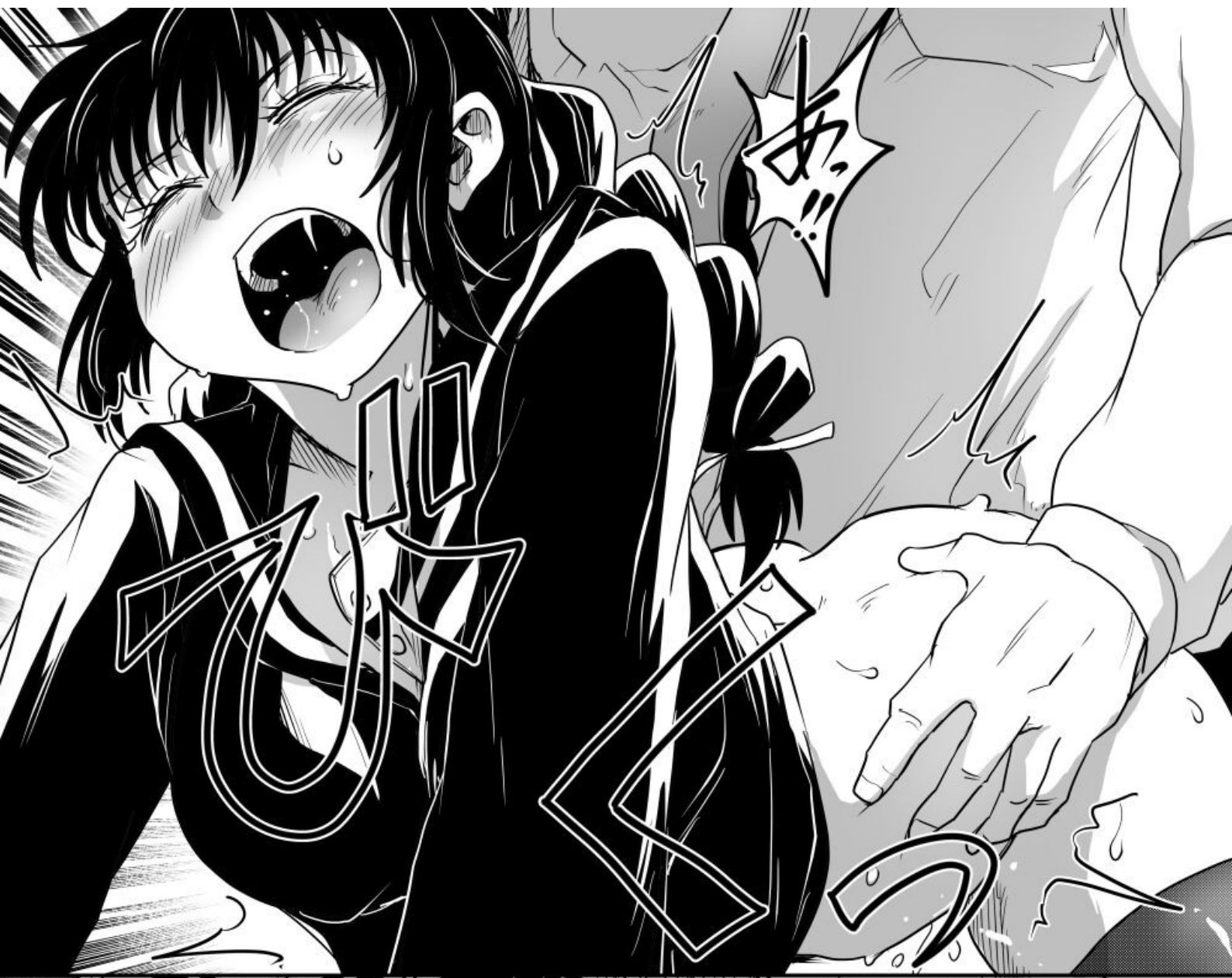
息が少しずつ
安定していく

ここで突く









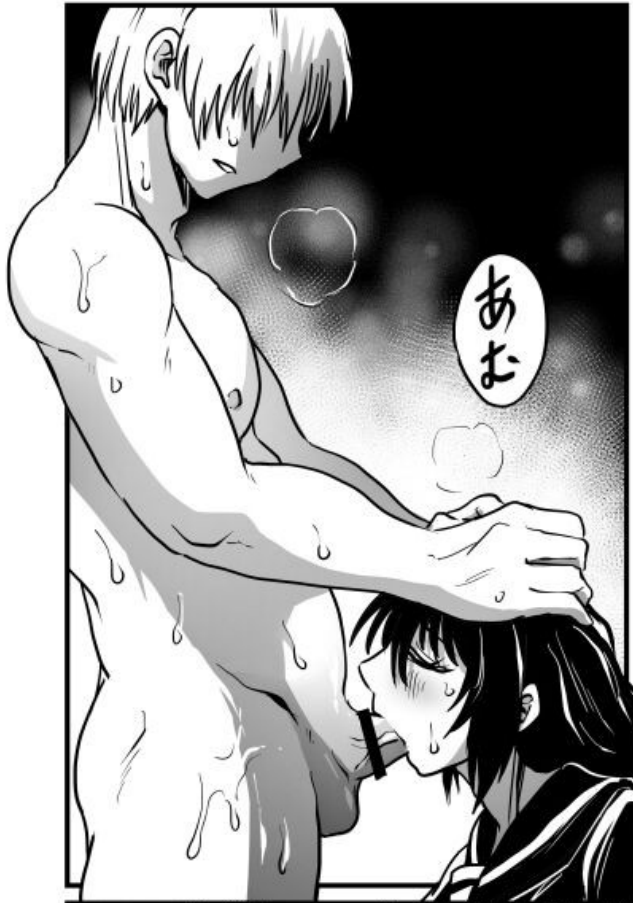
段々彼女の体の
扱い方が乱暴に
なってしまう



汗と愛液と
精液の匂いで
頭がボーっとする



ストーブの熱と
体の熱とが
混じりあう



匂いが染みるのが
嫌なら、
服を脱ぐしかない



唾液と少しの
精液が
少女の服に滴る



容赦なく
彼女の口内を
楽しむ





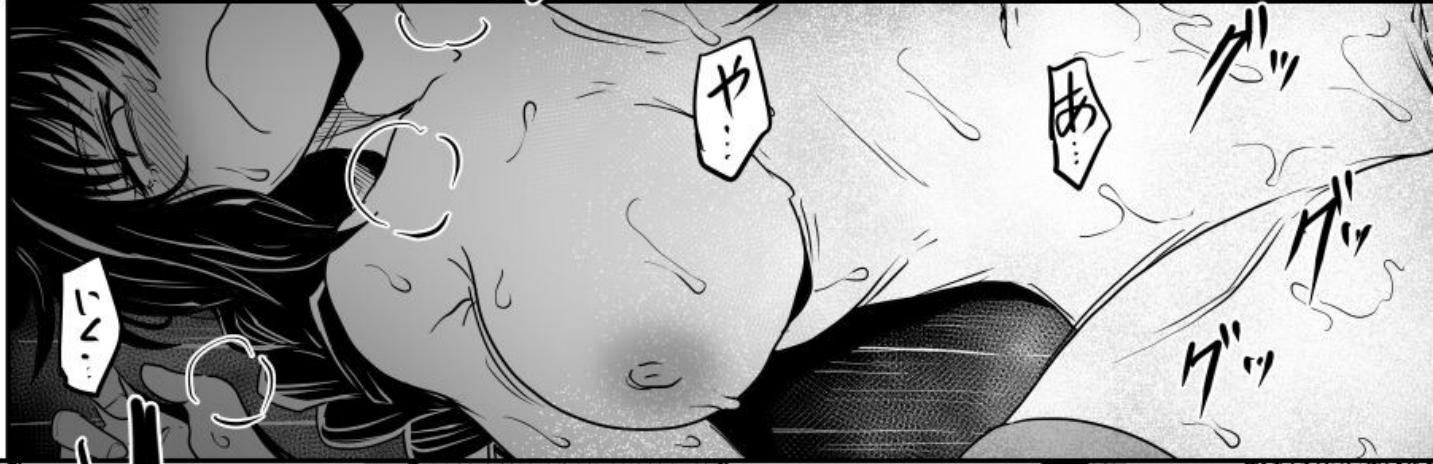
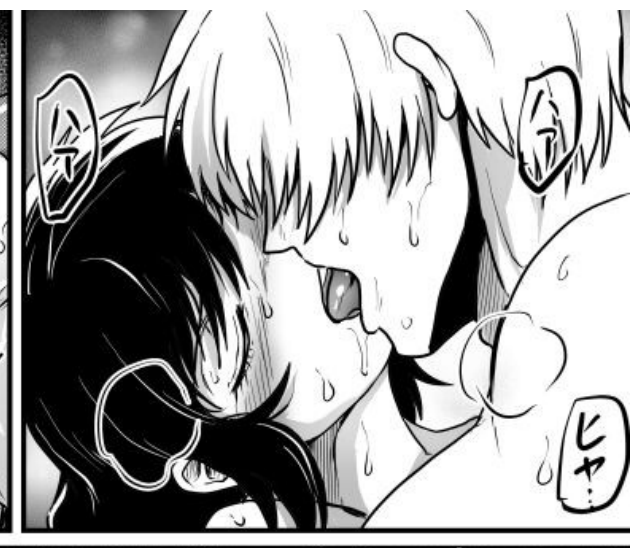


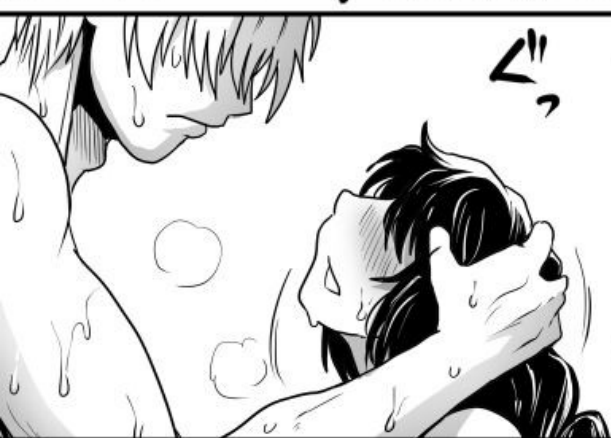
もうどちら
の体か
わからない



ただお互いの
体を貪りあう









読了ありがとうございます
二〇二四—〇一—二九

